

国語教育と方言

著者	小林 初夫
雑誌名	首都圏言語研究の視野：首都圏の言語の実態と動向に関する研究 成果報告書
ページ	257-277
発行年	2014-02-25
シリーズ	国立国語研究所共同研究報告；13-02
URL	http://doi.org/10.15084/00002736

国語教育と方言¹

小林 初夫

(福島県双葉郡浪江町立幾世橋小学校²・福島市立岡山小学校(兼務))³

皆さん、こんにちは。今、久野先生からご紹介をいただきました、福島県の南相馬市というところで小学校の教師をしております小林初夫と申します。よろしくお願いします。

1. はじめに

1. 1 東日本大震災の発生と原発事故による避難

南相馬市というのは、最近、テレビのニュースなどでもよく報道されていまして、東日本大震災で地震や津波の被害もあったんですけれども、それよりも何よりも東京電力の原子力発電所が近くにありまして、その被害が非常に大きいということで、連日、テレビなどで話題になっております。今回事故が起きてはじめて、私の家が原子力発電所から 18 キロの所にあったということがわかりました。

地震が起こった 2011 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分、グラグラグラと大きく長い時間ゆれまして、大変だと思ったんです。その時は学校にいて、ちょうどあの時間は子どもたちが下校している時間で、半分ぐらいの子は帰って、あと半分ぐらいは校庭で遊んでいたんです。その時に非常に大きなゆれがきて、びっくりしました。避難訓練では机の下にもぐるとか、いろんなことをやっているけれども、実際に起きるとどうしていいかわからない、何をしてもいいかわからないという状態で、ただただおどおどしていたわけです。

それから校庭のまん中に集まって、そこに子どもたちが固まっていて、様子を見ていたのですが、保護者の方も心配して次々と迎えに来て、保護者の方に児童を引き渡しました。そのあと、津波がくるかもしれないということで、うちの学校は海からちょっと離れていて、山手のほうにあるんですけれども、川が近くにあるので危ないということで、その近辺は避難するようにという指示が出て、私の学校の体育館が避難所になったんです。

そして体育館に急いで避難所を作ってくださいという指示がありました。でも、避難所なんか作ったことがないし、どんなことをやっていいかわからないので、おどおど困っていたんです。ただ、体育館にマットがあるので、マットをひいたほうがいいかなと思って、マットをひいて、学習発表会とかそういうもののためにゴザもあるので、そのゴザをひいたり、いろんなことをして避難所らしきものを作って、夜になってから市役所の人に引継ぎをして自宅に帰ったんです。家に帰るまでの途中は停電で暗くて、道路が陥没していたり大変な状態でしたが、家に帰ったら、

¹ 本稿は、國學院大學文学部日本文学科におけるゲスト授業「国語教育と方言」(2012 年 1 月 17 日(火))の録音に基づき原稿化したものである。

² 東京電力福島第一原子力発電所事故による警戒区域内所在のため休校中。

³ ゲスト授業時の所属は、福島県南相馬市立上真野小学校。

家の中も大変な状態でした。屋根瓦は落ちて、ブロック塀は倒れ、食器棚や本棚はすべてグチャグチャな状態だったんです。家の戸を開けて入るんですが、開けて入るところが、もう入ることができないという状態です。物がグチャグチャに散らばっていて、どうしようもない状態でした。

次の日、それを片づけようとしたんですが、道路にブロック塀とか瓦が落ちているんです。それで隣近所で集まってその片づけをしたんです。自分の家の片づけはそれが終わってからということで、その日は隣近所の片づけだけをやっていました。ところがその夜、急に原発の事故のために避難してくださいという避難指示が出て、家の外に出たらもうすごいんです。車が道路にずらっと並んでいて、本当にすごい状態でした。そのあとは避難所を転々として、それから住まいが5ヶ所ぐらい変わりまして、いま現在は福島市に避難して、生活をしています。

異動はなかったんで、学校は変わらなかったものですから、南相馬市に通っているのですが、峠を越えて通うので冬場は大変です。毎朝5時に起きて6時に家を出ていくという生活をしておりまして、ちょっときついのですが、まあがんばっています。

1. 2 方言への関心と取り組み

私は小学校の教師をしていますが、方言に非常に関心があって、方言の勉強をしながら国語教育をしています。大学のときに常磐線の電車に乗っていたら、私の住んでいる所から仙台までは80キロぐらいあるんですけども、その80キロぐらいでも乗り降りする人たちのことばがいろいろ違っているの面白いなと思って、方言にだんだん興味をもっていきました。大学のときの講義で、方言学の講義を受け、方言が学問の研究の対象になるということにびっくりしまして、それなら自分でもいろいろ調べてみようと思って、調査して集めた資料を使い卒業論文を書いて、卒業してからも関心があるのでずっと続けています。

そのかわり、方言に関係することでお手伝いできることは、いろいろお手伝いをしています。地元のテレビ番組とか、生涯学習の講座とか。それから仙台の宮城教育大学と、福島県の警察学校で授業をもっています。いろいろ聞いてみると、警察学校で方言の授業をやっている所は日本全国で福島しかないということを聞いて、私も大変驚いたんですけども、先駆的な試みをしているなと思いました。

今現在、福島県、宮城県、岩手県には、全国の警察の方が応援に、2週間、3週間派遣されてきて、よその都道府県のパトカーが走っています。よその警察官がたくさんいて、その会話を聞いていますと、方言が飛び交っているんです。そこで警察官たちに質問してみると、「こちらのことばは、わからないことばがあるな」とか、逆に避難所にいる人たちに、「ここに来たおまわりさんのことばはどうですか」と聞くと、「なんだかちょっとわからなかったな」とか、いろんな印象を語ってくれて非常に面白いんです。

それで福島県に来た警察官にインタビューしたり、調査したりすれば、面白い資料が得られそうだと思っていたところ、この春、警察官を増員するということで、全国から来た警察官を、福島県の警察官として採用するということをやるんです。そうすると、応援部隊が今度の3月末から来なくなっちゃうんです。非常に残念だなあと考えています。やっぱり思ったときにすぐやらなくちゃいけないなと思いました。でも、採用したときに採用時の研修があるので、もしかし

たら、そのときに何かお手伝いできることがあるのではないかと考えています。

警察官がパトカーでパトロールしたときに、無線でいろいろ指示を出したり、連絡をしたりします。かつては、それをそれぞれの警察署単位で無線でやっていたんです。ところが、今は福島市にある本部で全県の無線を管理している、そういう集中管理システムになったものですから、わからないことばが飛び交っていて困ることが時々あるそうです。不審な車のナンバー照会というのを無線でやるのですが、そのとき、「・(点) 5 3 2」と言うときに、点を「ポツ」と言ったり、「ポチ」と言ったりする。そういうのが無線に入ってきて、「最初はふざけてるんじゃないかと思った」と、通信指令室の若い福島県出身の警察官が言っていました。なるほど、そういう無線用語でさえも違ってくる、地域差がある、これは面白いネタがいろいろ集められそうだなと思ったので、早速、通信指令室にそういうことがあったときには書き留めておいてくださいとお願いしてきました。

そんなふうにして、いろんなところに方言やことばの面白さがあると、ネタ集めをして、学校で紹介したり授業で活用したりしているわけです。けれども小学校の教師なので、国語が終われば算数、算数が終われば社会、理科と他の教科も教えています。

2. 国語教育の現状と課題 ―国語の授業を考える―

2. 1 国語の授業は好きですか？

私は、方言やことばにすごく興味、関心があって、国語はもともと好きでした。けれども、大学のときに教育実習をしたり、その後教師になっていろんな学校の授業を見に行ったり、自分たちの学校の研究会で、お互いに先生方で授業を見合ったりしながら思っていたことは、国語の授業はあまり楽しくないなあという印象と、これが本当に国語の授業なのだろうかという疑問です。

皆さんにちょっとお聞きしたいんですが、ここにいる皆さんは、国語の授業、あるいは国語が好きでしょうか。小学校のころを思い出してみても、国語の授業が楽しかった人、ちょっと手をあげてみてください。――はい、ありがとうございます。どちらかといえば楽しかった、まあ楽しかったという人、手をあげてください。――はい、ありがとうございます。あんまり楽しくなかったという人。――はい、わかりました。すごく苦痛だったとか、面白くないとはっきりいう方はいらっしゃいますか。――さすがにこれはいない。はい、ありがとうございます。

国語の授業で、私がいろんな話を聞いて思ったのは、国語の授業には正解がないから好きだという人がいます。正解がないから何を言っても正解になると。算数や数学の好きな人に聞くと、国語の授業は正解がないから嫌いだという人がいて、逆のようなことを言うのですが、はてはて国語の授業とは一体何なのかと考えてみたときに、国語の授業というのは、読んだり、書いたり、話したり、聞いたりする、そういう力をつける、ことばの力をつけるのが国語の授業であり、国語の教育です。国語の教科書には、みんながそういうことを勉強できるようにするためのいろんな教材が載っているわけです。

しかし、国語の授業はことばの授業なので、ことばの力をつけるわけですがけれども、そういうあたりまえのことが、あんまりできていないのではないかというような感じが、昔から非常に

しています。大学生のときもそう思っていて、大学生のときに思っていた気持ちが今も変わっていないんです。教師になっていろんな授業を見たり、自分で授業をしたりしてみて、今でもその気持ちが変わっていないんです。

2. 2 変わらない国語の授業

それはどういうことなんだろうといろいろ考えてみると、国語の授業そのものが昔からあまり変わってはいないということです。国語教育学とか、そういう学問的な国語教育の分野でいろんな実践がなされたり、研究がなされたりもしているのですが、基本的なところはあまり変わっていないような感じがします。

『学習指導要領』というのがあって、授業はそれに沿って行われています。この『学習指導要領』がこのあいだ改訂されました。国語の目標がどんなふうに変ったのかというのを見たのですが、まったく変わっていませんでした。その目標というのは、「国語を適切に表現し、正確に理解する能力を育成し、伝えあう力を高めるとともに、思考力や想像力および言語感覚を養い、国語に対する関心を深め、国語を尊重する態度を育てる」という、なんだか硬い文章で、長ったらしいですね。教員採用試験には、こういうのが虫食い問題で出るんです。そういうときに線を引いて、思考力、言語感覚、そんなことばを覚えるんですけども、どうもここに書いてあることばは変わらない、やっている中身もあまり変わってないということを、いろんな授業を見て感じます。

2. 3 ことばの力を育てる授業になっていない

国語の授業というのは、ことばの力をつける授業であるはずなのに、なぜかことばの授業になっていないというのが多いのです。国語の教師＝文学の教師みたいに見られていた時代があったんですけども、今もそういうのがすごくあって、国語の教師というと、本たくさん読んでますねとか、小説、作家は誰が好きですかとか、そんなことを聞かれるようなことが時々あるということが、先生方との集まりでよく話題になります。国語の教師＝文学の教師、国語の教師＝国文学・日本文学の教師みたいな感じで、国語の教師＝ことばの教師、国語の教師＝国語学・日本語学の教師という認識はあまりないんです。

それは教科書にもはっきり反映していて、いろんな教科書会社の教科書を見ますと、言語事項に力を入れている、ことばについて大事にしている教科書もありますが、それよりも文学作品などの文章に力を入れている教科書が多いのです。その傾向は、教科書をずっと見てみると、どうも昔からあまり変わっていないような感じがします。そうすると、教える教師の意識も変わらないので、同じような授業のくり返しが行われている。だから国語の授業は昔と今であまり変わっていないのではないかという感じがします。

2. 4 「伝統的な言語文化」＝古典 か？

『学習指導要領』の中に、「言語活動」と「伝統的な言語文化」ということばが入ってきましたので、これを機会に、身近な地域素材の教材として方言を取り上げることがしやすくなってき

たのではないかと思います。

そのためにどんなことをしたらいいのかということですが、今、国語教育で「言語活動」と「伝統的な言語文化」が、キーワードになっています。でも、何をやっていいのか、実際のところ、現場の教師はわからないで迷っていて、先行的な実践があると、それをみんなまねします。そうすると同じようなものがずっとできてくるということで、伝統的な言語文化で、方言を扱っている授業実践というのが、まだほとんどないので、今その実践をやれば、方言を教材として授業することができるということに教師が気がついて、それがじわじわと全国的に広まっていくのではないかと思います。

そういう先行的な実践例がないために、今は伝統的な言語文化というと、どうしても古典とか古文、漢文の読み方に偏ってしまっています。また、声に出して読むのがいいと誰かが言うと、それが流行って、教師は教室や廊下に「声に出して読もう」なんて書いて掲示しているんです。

2. 5 国語教育に方言を取り入れる必要性

子どもたちのことばの環境は、それぞれ地方によって違います。それぞれ違った所で、違ったことばが、子どもの身近な所で飛び交っているわけですから、それを利用してというか、それをまず見つめさせる。子どもたちに見つめさせなくてはいけないし、それを見たり聞いたりする目や耳を育てなくてはいけないと思うんです。でも、なかなかそういう見たり聞いたりする能力というのは育たないというか、育てる機会があまりないというのが、実際のところなんです。

教師がそういうことをさせたければ、教師自身がその地域のことばに関心をもたなくてはいけないのですが、教師自身もあまり関心をもたない。この町も、隣の町もことばは同じだ、あまり変わらない、と。でも、本当にそうか。実際は違っているんです。でも、そういう感覚をもつためには、子どもたちにそういう感覚を鋭くさせるためには、教師がそういう感覚をもつ必要がある。教師がそういう感覚をもつためには、関心をもたなくてはいけないし、そういう勉強をしなくてはいけない。そのために、教員養成の段階で勉強するきっかけがなくてはいけない。大学の、少なくとも国語の免許を取るような学生の方には、その地域のことば、方言を見つめるような授業は必修であったほうがいいのではないかと思います。国語教育に方言を取り入れることは必要であり、なくてはならないことだと思います。

2. 6 「聞く」ことを鍛える

もう一つそう思う理由は、さっき、言語活動と言いましたけれども、子どもたちに何か言語活動をさせるためには、話すでも、聞くでも、書くでも、そうですね、子どもたちのことばを教師がわかっていなくてははいけません。でも、子どもたちのことばを教師がわかっているかというと、あまりわかっていない。なぜか。教師は話して教えるから一方通行になりがちで、子どもから聞くということがあまりない、ありそうでないんです。子どもたちにいろんな発表会とかをさせていますけれども、その発表会でも、「もっと大きな声で」とか、「聞こえませんか」と言ったりして、後ろのほうに教師がいて、「ここまで聞こえてこない」と注意する。

しかし、大事な指導は、発表のときに「もっと大きな声で」ではなくて、聞いている子どもた

ちに、「みんなよく聞いて」、「はい、静かに聞いて」というふうにして、聞く指導をしたほうがよほど聞く力が育つというか、発表するほうに、もっと大きな声を出してと言うよりも、送信よりも受信の装置を鍛えたほうが、かえって効果があるのです。

2. 7 『学習指導要領』に対応させた方言の扱い方

『学習指導要領』の中で、小学校低学年には、「丁寧なことばとふつうのことばとの違いに気をつけて話すこと」と書いてあります。ですから、低学年の段階で、丁寧なことばとふつうのことば、二つのことばがあるということに気づかせなくてはいけない。

それから3、4年の中学年になると、「丁寧なことばを用いるなど、適切なことばづかいで話すこと」とあります。ですから、中学年になると、丁寧なことばを使って、そして相手に応じて、場面に応じて、適切なことばの使い分けをなささいということをやするわけですね。

そして5、6年、高学年になると、「共通語と方言との違いを理解し、また必要に応じて共通語で話すこと」となっています。ということは、小学校高学年の段階で、共通語と方言の違いを理解しなくてはいけない。共通語と方言があるということに気がついて、その違いを理解しなくてはいけない。何が共通語で、何が方言であるかということ、区別できるようにならなくては

いけない。

これが小学校6年間での国語教育の話すことの目標になっているのです。しかし、これを評価するテスト、試験はあまりありません。もし、あったとしても採点や評価が非常にむずかしい。じつは国語教育の現場では、話すこと、音声言語というのは、大事だ大事だといいいながらあまり大事にされていない。書きことばにくらべ、話しことばは大事にされていないというところがあります。

それから「伝統的な言語文化」というのが入ってきたのですが、実際、何をやったらいいかわからなくて、まだあまり現場の実践はないんですけれども、例として古文、漢文、あるいは近代以降の文語調の文章というのが例に出ています。しかしその中で、「話しことばと書きことばの違いに気づくこと」というのが高学年の中にあって、「時間の経過によることばの変化や世代によることばの違いに気づくこと」という一文が、新しい学習指導要領に入ったんです。

これは、方言を扱ういいチャンスの一つではないかと思います。こういうところで方言を扱わないと、古文、漢文などの音読だけになってしまい、地域のことば、方言というほうに関心が向いていかないのではないかと思います。

3. 小学校での国語の授業の実際

3. 1 「しっぽのやくめ」の授業例

実際に国語の授業で、どんな授業が行われているかということを、たくさん紹介したいのですが、時間も限られていますので、きょうは一つだけ持ってきました。「しっぽのやくめ」という文です。皆さんのお手元の資料の中にあると思います（次ページ）。これは以前、光村図書の教科書に載っていたのですが、いつの間にか消えてなくなりまして、今は「光村ライブラリー」



長いしっぽです。
これは、なんの
しっぽでしょう。

どうぶつのしっぽは、
いろいろなやくめを
しています。



太いしっぽです。
これは、なんの
しっぽでしょう。



これは、くもぎるの
しっぽです。
くもぎるは、しっぽで
くだものをもぎとります。
くもぎるのしっぽは、
手のようなやくめを
しているのです。

これは、きつねの
しっぽです。

きつねは、きゅうに
むきをかえるとき、
しっぽを強くふります。

きつねのしっぽは、
船のかじのような
やくめをしているのです。



先の方に、
ふさふさした毛が
生えています。

これは、なんの
しっぽでしょう。



これは、牛の
しっぽです。
牛は、しっぽで
はえやあぶを

おいはらいます。
牛のしっぽは、
はえたたきのような
やくめをしているのです。



「しっぽのやくめ」(光村ライブラリー〈第5巻〉『からすの学校 ほか』(光村図書出版, 2002))

の『からすの学校』という本に入っています。小学校1年生の教科書にあって、子どもが初めて学校で学ぶ説明文、人生最初に出会う説明文がこの文章でした。

私が国語の授業をあちこち見て歩いたときに、この授業が非常に多かったんです。動物が出てくるし、なんだか楽しそうで扱いやすいというので、先生方はよくこの授業をやっていました。ちょっとこれを皆さんに読んでいただきたいのですが、おひとりずつというのは大変でしょうから、みんな一斉にこれを読んでください。はい、どうぞ。

(会場唱和)

どうぶつのしっぽは、いろいろなやくめをしています。

長いしっぽです。

これは、なんのしっぽでしょう。

これは、くもざるのしっぽです。

くもざるは、しっぽでくだものをもぎとります。

くもざるのしっぽは、手のようなやくめをしているのです。

太いしっぽです。

これは、なんのしっぽでしょう。

これは、きつねのしっぽです。

きつねは、きゅうにむきをかえるとき、しっぽを強くふります。

きつねのしっぽは、船のかじのようなやくめをしているのです。

先のほうに、ふさふさした毛が生えています。

これは、なんのしっぽでしょう。

これは、牛のしっぽです。

牛は、しっぽで、はえやあぶをおいはらいます。

牛のしっぽは、はえたたきのようなやくめをしているのです。

はい、ありがとうございました。お手元の資料は教科書を縮小コピーしたもので、実際の大きさというのは、こんな大きさです(写真1)。こんな感じです。カラーで非常にきれいな絵になっています。まず、「どうぶつのしっぽは、いろいろなやくめをしています」と書いてあって、最初のところに、こんな絵が三つあります。これはあとで出てくるしっぽのやくめと関連してくるのですけれども、最初、「長いしっぽです。これはなんのしっぽでしょう」となっています。次のページは見えませんが、だいたい教師は子どもたちに、「はい、これはなんのしっぽかな？」と考えさせます。子どもたちはいろいろ考えますが、中にはもう次のページを見ている子もいるんです。すると、「あっ、〇〇ちゃん、見てはだめだ



写真1

よ」と注意する。でも、もう見てますからね。

次、「これは、くもぎるのしっぽです」。でも、くもぎるなんていうさるの名前、ここではじめて聞く人が多いんですね。「知ってる、知ってる」という声があるけれども、これをチラッと見て知ってるのであって、くもぎるを知っているわけではないんですね。そして、これはくもぎるのしっぽだと。「ああ、これはくもぎるっていうんだね、そっかあ、果物をもぎとるんだ、果物をもぎとることできるなんて、すごいなあ」などと、教師は子どもに向けていろいろ語りかけます。子どもたちはそれを興味深く聞いているわけです。そして「くもぎるのしっぽはなんの役目してるの？」なんて聞くと、「手のような」などと子どもが言うわけです。「そうだね、はい、手のように線を引きましょう」。あるいは「手のようなとノートに書きましょう」と言って書かせます。

次、「太いしっぽです。これはなんのしっぽでしょう」。子どもはこれを見ると、「きつね」と言う。これは次のページを見て言う子どももいますが、山間部の学校だと、「みんな、きつねを見たことある？」なんて聞くと、「ある。おじいちゃんがこのあいだ捕まえてきた」などと言います。「そうか、おじいちゃんが捕まえてきたのか、すごいなあ。どのぐらいの大きさだった？」。「このぐらい」「あのぐらい」などと答える。

楽しそうですがけれども、ほとんど国語から脱線していますね。(笑い)「そうか、そうか」。「きつねのしっぽって、みんな、こんなふうに動かすの、知ってたかな？」「知らない」。「今はじめて知った？」「うん、知った」。「教科書にはいいこと書いてあるよね」などと言う。「急に向きを変えるときにしっぽをどうするの？」と聞くと、「強くふる」と答える。「そうだね、強くふるに線を引きましょう」と指示する。あるいは逆に、「どんなときにしっぽを強くふるのかな？」と聞くと、「急に向きを変えるとき」と答える。「そう、急に向きを変えるときに線を引きましょう」と指示する。こんなふうに流れていく授業が行われています。

次、「船のかじのようなやくめをしている」。「船のかじって何だろうね？」。大人ならわかりますけれども、子どもにかじと言うと、ぼうぼう燃えてる火事だと思うんです。「船が火事になったんだ、大変だ」とかいろいろなことを言い出す。そのときに最初のページの絵がヒントになってくるわけです。

次、「先のほうに、ふさふさした毛が生えてる。これはなんのしっぽだろう？」「牛」。あたりまえです。これはどう見ても牛にしか見えません。くもぎる、きつね、牛と、だんだんむずかしくなるのではなくて、だんだん簡単になってきている。「そう、これは牛のしっぽだね。牛はしっぽでなにをするの？」と聞くと、子どもはここを見て、「はえやあぶをおっぱらっています」と答える。「おいはらっている」と言う子どもはほとんどいません。「そう、おっぱらってるってことは、おいはらっていることなんだよ」なんて言いますが、「おっぱらってる」と言ったときに、「おっぱらう」が「おいはらう」だということを、丁寧に教えなくてはいけないんです。

「じゃあ、みんな、ほかにしっぽのある動物、どんな動物がいるか、みんなの知っている動物をノートに書きましょう」。そして次々としっぽのある動物をノートに書く。書き終わった頃を見計らって、発表させる。あるいはその発表したものを板書する。「皆さん、たくさん動物知ってるね。すごいねえ」、ほめられた子どもたちは笑顔。教師も笑顔で、活発な国語の授業は終

わっていくわけです。

3. 2 ことばの力は育っているか

さて、ここです。この授業で、子どもたちのことばの力、言語能力は何がついたのでしょうか。あるいは何がつくのでしょうか。そういうことを考えると、どうも楽しい、面白いで終わっているような授業はたくさんあるのですが、ことばの読み取りをきちんとやっている授業というのは、あまり見られない。私は授業研究会などで、そういうことを言ったり、あるいはそういうことを質問すると、「1年生は入門期なので、楽しくやらないと、国語嫌いをつくってしまう」とか「初めて出会う説明文で、そんなむずかしいことをやっていたのでは、子どもたちが説明文嫌いになってしまう」と先生方から返されることがよくありました。

しかしながら、本当に知的で楽しい授業を組み立てれば、決して子どもたちはつまらないとか、嫌いだというふうにはならないということを、私は自分の授業でいろいろと試みております。それにはどういうことが大事かという、まず基本的に国語の授業がことばの授業になっているということです。ここにはたくさん絵がありますけれども、もちろん、絵を見るのはいいことです。絵と文章を対応させて読んでいくことはいいことですが、このことばを大事にしないではいけません、ことばが大事であるということをもう少し意識しなくてはいけません。

3. 3 ことばを大事に考える授業とは

3. 3. 1 くもざるのしっぽ ―対義語、語源、連濁

どういうことかといいますと、たとえば、このくもざるのしっぽの場合には、「長いしっぽです」というときに、「長い」ということばの反対が「短い」であり、「短い」があって「長い」があるということにも、留意しなくてはいけません。長い手足としっぽがあり、くもを連想させるからくもざるというのだという予備知識を教師がもっていることも大切。また、「くも」＋「さる」が「くもざる」であるという、ここで複合していることを教えることもいいことだと思います。

3. 3. 2 「もぎとる」と「とる」 ―類義語

また、ここで大事なのは、「くもざるは、しっぽでくだものをもぎとります」というところで、「くもざるはしっぽで何をするの」と聞くと、「くだものをとる」とか「りんごをとる」と答えて、「はい、そうですね」と言って、終わってしまうのがほとんどですが、私はそこで終われません。

私はどういうふうにしたかというと、本物のりんごを教室に持っていきました。そして私がりんごの木になって、(実演)「はい、先生はりんごの木です。はい、ここにりんごがあります。はい、〇〇さん、りんごをとってください」と言う。子どもは、「えっ、本当にいいの?」と聞きます。「いいよ、はい、どうぞ」。「はい、とって」。「とってください」。私は力を入れて強くつかんでいるのでとれない。「ああ、残念だね。とれなかったね」。「それじゃあ、とってくださいでとれなかったから、もぎとってください」と言います。「もぎとって」のところを強調して言

います。そうすると、クイッと、子どもはこうやってとります（実演）。「おっ、すごい、とれた」。私は子どもが手をねじったとたんに手を離します。すると、「あれ、どこが違う、もう1回見てみよう」、そしてもう1回やらせると、「とる」のときには下にやったけれども「もぎとる」のときには、こうやった。（実演）「これはなんだい？」と聞くと、「ねじった」とか「回した」ということばが出てくる。それをすぐに板書します。そして「何かもぎとったことがある？」と聞くと、「柿もぎしたことがある」とか「トマトをもぎったことがある」と返ってきます。「そう、もぎったことがある、そうすると、『もぎる』と『とる』は違うんだね」ということを、子どもたちにそこで気づかせるわけです。「とる」ではとれない、でも「もぎる」だととれる。そういうことに気づかせて、「もぎとる」は、ねじってとってる、力を入れてとる、「とる」ではとれないような、強くくっついてるものをとることが「もぎとる」なんだと、子どもたちにわからせるようにします。また、「もぎとる」は、「もぐ」と「とる」が合わさったことばだということを教えると同時に、ねじって切り離すことだと教えることも大切です。子どもの家庭や地域の実態も大事です。「何かもぎったことがある？」と聞いたとき、いちごの栽培農家が多い地区では、「いちごは、もぎとるって言わないの？」と聞くと「言わない」と返ってくる。「なんていうの？」「いちごはつむ」。「あっ、いちごつみて言うね」。そうすると「つむ」と「もぎとる」は違うんだなということにも気づかせることができる。

3. 3. 3 うしのしっぽ —先の「ほう」、はえたたきの「ような」

それから牛のしっぽで、「先のほうにふさふさした毛が生えています」のところは、普段授業で使う指示棒を利用して、「この棒の先のほうってどこかな、ちょっと、〇〇くん、さわってみてください」などと言います。実際にやってみましょう（写真 2）。この棒の先のほうってどのへんですか。ちょっと人差し指でさわってください。——そのへんですね。



写真 2

いま3人の方にさわってもらったところ、「先」はどこでしょうと、「先」と言ったときには先端をさして、「先のほう」と言うと、このへんもかなと。「先のほう」と言うとき「ほう」を強調すると、だんだん示す部分が先端から離れてきます。そんなふうにして、「先のほう」の「ほう」に注目させる、「先」ではない。そういうことを、「先」も「先のほう」も同じとしてしまうと、大事な意味をあいまいにしてしまうので、ここで正確にことばにこだわって教えることが大事です。

それで「先のほうにふさふさした毛」ということで、パソコンの画面をきれいにするものがありますね。短い柄がついて、上のほうがふさふさした、デスクトップクリーナーというのでしょうか。あれを用意しまして、「先のほうにふさふさした毛というのはこういうものだね」と、パッと出して見せました。「先」と「先のほう」が違うということを教えることはとても大事です。「消防署のほうから来ました」なんて言いますね。（笑い）「消防署のほうから来ました。消

火器はいりませんか」と。消防署から来たならまちがいはないけれども、消防署のほうからはあやしいですね。ただ、方向しかさしていない。そんな変な訪問販売から身を守るためにも、「先のほう」の「ほう」は大事にしたほうがいいのかと私は思います。

それから、「牛のしっぽはなんのやくめをしますか」と聞く。すると、「はえたたきのやくめをする」と答える子どもが必ずいます。そのとき、私は「はえたたきのやくめ、ほほう」と言っ
て、はえたたきをパッと出します。そして『はえたたきのやくめ』って書いてあるかなあ？
と言うと、子どもたちは本文を読み返し、『はえたたきのような』って書いてある」と気づく。
板書して、はえたたきを見せながら、どう違うのかを考えさせます。子どもたちはだんだんと気づいてきます。はえたたきというのは、はえをバシッと殺します。でも、牛はしっぽで殺せない
んです。ヒュッヒュッヒュッと振って、ただ追い払うだけですね。それからのはえたたきだと、ど
こにでも持って動いていけるので、はえの移動に合わせて人間も動いて、バシッとできますけれ
ども、牛はしっぽで、いろんな所に行つて、はえをパシパシはやらないですね。牛は動かないで
自分の所に来たハエを追い払うだけです。ですから、似てるけれども違うんです。だから「はえ
たたきのような」となっている。そんなことで「ような」ということを、ここで強調して教える
わけです。

そんなふうにして、何気なく言い換えたり、あっさり流しているようなところを流さないで、
しっかりことばにこだわって、ことばに注意して、気をつけてやっていく。それによって子ども
たちが次に説明文を読むときに、ことばに気をつけて読むようになるんです。そして、何かちょ
っと違いがあるなと感じたときに、その違いは何だろうということを考えるようになるのです。

3. 4 国語の授業で最も大切なこと ―ことばの力を育てるにはどうすればよいか

似たようなことばだからといって、簡単に言い換えて済ませるのではなく、どう違うのかを
考えさせることが大切です。

たとえば、「きれい」と「美しい」の違いを教えるときに、「部屋をきれいにするって、どん
なふうにすることかな？」と考えさせる。すると「掃除機をかける」とか、「窓を拭く」などと
出てくる。次に、「部屋を美しくするには？」「美しい部屋ってどういう部屋？」と聞く。「きれ
いにしてから、花とか何かを飾ったり…」と、お掃除プラスアルファが出てくればしめたもの。
何か違うことを感じている。

「ご飯をきれいに食べなさいって言われたらどうする？」と聞く。「ご飯つぶを一つぶも残さ
ないで食べる」。「じゃあ、ご飯を美しく食べなさいって言われたらどうする？」と聞く。「し
せ
いよくすわる」。「背すじをピンとのぼす」。「ちゃわんとはしをきちんと持つ」。だんだんと違い
に気づいてきます。違いの説明がうまくできなくても、違いに気づかせることが大事です。その
違いに気づいたときに子どもたちは、「ああ、なるほど！」と思い、今度は自分で作文を書いた
りするときに、ふさわしい的確なことばを使って表現できるようになるのです。そんなふうにし
て、ことばを大事にして教えていく授業をしなければ、国語の授業がことばの授業として成立し
ないんです。

「しっぽのやくめ」で、こんな授業を見たことがあります。ここに出てくる動物について自

由に調べるように課題を出して、子どもたちが図鑑などで調べてきたことを発表し合います。くもぎるやきつね、牛について百科事典的な知識を並べさせるんです。それはもう国語ではなくて理科です。

かつて、「じゃがいもの一生」という説明文教材があり、学校でじゃがいもを栽培し、それを観察させながら説明文の読み取りをさせるという実践が各地で行われました。これは国語の授業ではなくて理科の授業です。国語の授業は、その説明文に書いてあるじゃがいもの説明について読み取ることによって、説明文の読み方や、ことばについて学習しなくてはならないんですけれども、じゃがいもを栽培しながら読むととなると、それはもう国語ではないんです。

国語の授業というのは、ことばの授業なのに、なぜか一步まちがうと理科や社会の授業になってしまう。また、そうなっても、おかしいとは思わずに、熱心に教えてしまう。そういう国語の授業がけっこう多いんです。国語の授業はことばの授業になって成り立つものであって、ことばの力をつけることが国語の授業で最も大切なことです。そうするためにどうしたらいいかということを考えなくてはならないと思います。

4. 方言教材の必要性

4. 1 ことばのゆれ

ことばに関心をもたせるために、方言の授業をすると、子どもたちは熱心に取り組みます。ちょっと古い実践を資料として持ってきました⁴。

「ことばのゆれ」という現象は、皆さんご存じでしょうか。『国語学大辞典』には次のように説明があります。

ゆれ fluctuation【事実】言語体系には不安定な部分もあって、個々の言語形式に即していえばゆれているものがある。諸方面のゆれの現象があるが、語形のゆれを中心にみると、それは、ある単語の同一の機能をもつ語形が、同一の共時態において、二つ（以上）共存している不確定な状態である。「ニッポン／ニホン、イク／ユク、トートイ／タットイ、カッテ／カツテ、セー／セ（身長）、ホー／ホホ（頬）、ジューフク／チョーフク（重複）／ムズ（ツ）カシイ、コマヌ（ネ）ク、イリグ（ク）チ、サンカ（ガ）イ（三階）、イッシヨ（シヨ一）ケンメー」のようなものが現代日本語におけるゆれの例としてあげられる。（以下略）

（国語学会編『国語学大辞典』東京堂、1980、「ゆれ」の項）

これを授業にしたら面白いだろうと思っていたのですが、教科書を調べると、教材になっていないんです。こんな面白いものがなぜないのかと雑談で話題にしていたら、宮城教育大学の松本宙先生が、教材文にして授業をしてみようじゃないかとおっしゃって、「ことばはゆれている」という教材文を作ったんです（次ページ）。子どもたちの身近にあることばを取り入れて、教材文にしてはいかがでしょうかとご提案したところ、私の住んでいる小高町（今は南相馬市ですが、前は福島県相馬郡小高町でした）のことばをちょっと入れてくださいました。この教材文を使って6年生で授業をしてみました。すると子どもたちの反応がとってもいいんです。小高町の

⁴ 松本宙(1997)「「ことばのゆれ」を教材化する」(宮城教育大学国語国文学会編『国語科の新しい授業を創る』明治図書、所収)

ことばはゆれている

松本 宙

東京の「新宿」を、かなの通り「シンジュク」と言う人は少ない。東京では、たいていの人は「シンジク」と言っているようだ。「さびしい」という語を「さみしい」と言う人も見られる。さて、この文を読んでいるあなたはどうか言っているだろうか。発音だけでなく、「よい」と「いい」のような言い方もある。「よい」と「いい」とどちらが正しいだろうか」と聞いたら、「どっちでもええ」と答えた人がいたという笑い話がある。

「シンジュク」と「シンジク」、「サビシイ」と「サミシイ」、あるいは、「よい」と「いい」のように、同じことを言うのにいくつもの言い方があって、使い分けに迷うような場合がある。まるで、時計の振り子のように二つのことばの間をふらふらゆれているので、こういう現象を「ことばのゆれ」と呼んでいる。私たちのまわりにはこのようなゆれの例が山のようにある。「あたたかい」と「あつたかい」はどうちがうのか。「手術」ということばも「シュジュツ・シジュツ・シジツ」のようにいろいろな発音がされている。「言った」と言うところを「ユッタ」と言う人もいる。「行く」

にも「ユク」と「イク」の二つの言い方がある。私たちの小高町では、「持ち上げる」ことを「タンガク」と言うが、「タガク」と言う人もいる。「昨日」を「キノー」とも「キンニョ」とも言う。これらは発音のゆれだ。



キノー
キンニョ

日本の切手にはローマ字で「日本」と印刷してある。千円札や一万円札にも「日本」と書いてある。それでも「日本」という国の名がニッポンかニホンかはいつも問題になっている。東京の「日本橋」はニホンバシだが、大阪の「日本橋」はニッポンバシである。「工場」という漢字はコウバともコウジョウとも読む。これは漢字の読み方のゆれである。

「お金が足りない」ことを「足らない」という人がいる。「足らない」はもともと西日本の方の言い方らしく、地方による言い方の違い、つまり方言間のゆれと言える。「言った」は西日本では「ユータ」となる。「水が飲みたい」と「水を飲みたい」では、あな

たはどちらを使うだろうか。「テレビゲームがしたい」と「テレビゲームをしたい」について同じである。「今日は暖かい」と言うが、「今日は暖かだ」とどっちが違うのか、二つの言い方があることは確かである。「見ることが出来る」ことを、「見られる」と言うか「見れる」と言うか。「食べる」ことができる」ことを「食べられる」と言うか「食べれる」と言うか。「見れる」や「食べれる」は正しい言い方ではないと言う人も多いが、今では大勢の人が使っている。つまり、ゆれている。「悪いだけれども」という言い方について、小高町でアンケートをしたとら、「悪いだケレドモ」「悪いだゲント」「悪いだゲンドモ」「悪いだゲンチョ」「悪いだゲンチモ」と、五通りの答えが返ってきた。これは個人によるゆれだが、こんなに変化がある「ゆれ」もめずらしい。

ことばのゆれの例は私たちのまわりにいくつも見つかる。「やばり」を「やっぱり」というのは、書きことばと話しことばのちがいがいかに知れないか。「やっぱし」だの「やっぱ」だのということばを使っている人もいるだろう。たぶんその人は、みんなのまえで発表するときなどは「やっぱり」と言うが、親しい友達の間では「やっぱし」「やっぱ」を使う、というような使い分けをしているのではないだろうか。若者の間で「ちがった」を「ちがかった」と言ったり、「きれいだった」を「きれかった」と言ったりするのはやっている。これも「やっぱり」「やっぱし」「やっぱ」のような使い分けがみえそう。ゆれていることばも、よく観察するとこのように、場面による使い分けが見つかるともある。まわりの人たちのことばを観察してみると、意外な発見があるかも知れない。

このように、ことばは様々なゆれにゆれている。発音のゆれ、漢字の読み方のゆれ、地方差によるゆれ、「見られる」「見れる」のような、ことばのきまりのゆれ、それに「やっぱり」と「やっぱし」「やっぱ」のような、場面によるゆれなどである。しかし、このような説明の出来ないゆれの例もたくさんある。あなたのまわりにも、たくさん「ことばのゆれ」があるはずである。これを機会に、自分自身やまわりの人たちのことばをじっくりと観察してみよう。

わっていくわけです。

3. 2 ことばの力は育っているか

さて、ここです。この授業で、子どもたちのことばの力、言語能力は何がついたのでしょうか。あるいは何がつくのでしょうか。そういうことを考えると、どうも楽しい、面白いで終わっているような授業はたくさんあるのですが、ことばの読み取りをきちんとやっている授業というのは、あまり見られない。私は授業研究会などで、そういうことを言ったり、あるいはそういうことを質問すると、「1年生は入門期なので、楽しくやらないと、国語嫌いをつくってしまう」とか「初めて出会う説明文で、そんなむずかしいことをやっていたのでは、子どもたちが説明文嫌いになってしまう」と先生方から返されることがよくありました。

しかしながら、本当に知的で楽しい授業を組み立てれば、決して子どもたちはつまらないとか、嫌いだというふうにはならないということを、私は自分の授業でいろいろと試みております。それにはどういうことが大事かという、まず基本的に国語の授業がことばの授業になっているということです。ここにはたくさん絵がありますけれども、もちろん、絵を見るのはいいことです。絵と文章を対応させて読んでいくことはいいことですが、このことばを大事にしないではいけなく、ことばが大事であるということをもう少し意識しなくてはいけません。

3. 3 ことばを大事に考える授業とは

3. 3. 1 くもざるのしっぽ ―対義語、語源、連濁

どういうことかといいますと、たとえば、このくもざるのしっぽの場合には、「長いしっぽです」というときに、「長い」ということばの反対が「短い」であり、「短い」があって「長い」があるということにも、留意しなくてはいけません。長い手足としっぽがあり、くもを連想させるからくもざるというのだという予備知識を教師がもっていることも大切。また、「くも」＋「さる」が「くもざる」であるという、ここで複合していることを教えることもいいことだと思います。

3. 3. 2 「もぎとる」と「とる」 ―類義語

また、ここで大事なのは、「くもざるは、しっぽでくだものをもぎとります」というところで、「くもざるはしっぽで何をするの」と聞くと、「くだものをとる」とか「りんごをとる」と答えて、「はい、そうですね」と言って、終わってしまうのがほとんどですが、私はそこで終わらせません。

私はどういうふうにしたかというと、本物のりんごを教室に持っていきました。そして私がりんごの木になって、(実演)「はい、先生はりんごの木です。はい、ここにりんごがあります。はい、〇〇さん、りんごをとってください」と言う。子どもは、「えっ、本当にいいの?」と聞きます。「いいよ、はい、どうぞ」。「はい、とって」。「とってください」。私は力を入れて強くつかんでいるのでとれない。「ああ、残念だね。とれなかったね」。「それじゃあ、とってくださいでとれなかったから、もぎとってください」と言います。「もぎとって」のところを強調して言

4. 2 方言を調べよう

子どもたちに方言の授業をするときに、いろんな扱い方があるんですけども、私が1つ、実践したもので紹介したいのは、「方言を調べよう」という宿題を出す方法です。

これはまず、その地域で方言がたくさん出てくるのではないかと予想されるものを、項目としてあげるわけです。たとえば、『方言辞典』のようなものや、『日本言語地図』という方言の分布地図、そういうものを見て、地域差がありそうなものを探して、作るのです。そういう文献で調べるほかに、教師自身がその地域で耳をすましていろいろと聞くということも大事です。教師自身もそうやって、前もって取材というか、調査をしておく。そしてこれを子どもたちに渡して、子どもたちが調べてきたものを、今度は教室で発表させたりするわけです。

子どもたちが実際に書いてきたものを二人分持ってきました（次ページ）。5年生の齊藤さん。これはちゃんと許可をもらっていますので、名前出していますけれども、こんなふうにいっぱい、バーッと書いてくるんです。小学校5年生が調べてきたものです。びっしり書いてあります。それから同じく5年生の高野さんが書いたものもあります。

これを子どもたちに発表させると、じつに楽しそうに発表します。おじいさん、おばあさんから聞いてきたことばで、自分たちが毎日耳にしていることばなので、とても上手に発音することができます。おじいさん、おばあさんは、孫に聞かれるとはりきって答えますので、おじいさん、おばあさんもうれしくなって、生き生きしてくるんですね。そうすると、「こんな方言もあるから」と、びっしりと書いたノートやレポート用紙を私に持ってきてくれることがあります。とてもうれしいおみやげです。私はうれしくなって、その家に行って直接お話を聞いたり、また教室に来ていただいてお話をしてもらったりしています。

おじいさん、おばあさんのことばに、愛着をもっている子はいいんですけども、親の考え方で、おじいさん、おばあさんのことばは「昔のことばだ」、「方言は古いことばだからあまり使わないほうがいい」などと子どもたちに教えている親もいます。そういう子どもは、おじいさん、おばあさんのことばに、あまりよいイメージをもっていない。残念ですが、そういう子どももいるんです。

でも、こういうを宿題を出して発表させたとき、たとえば、「かわいい」で「めんこい」と出てきたときに、『めんこい』というのは、じつは奈良時代のことばで、『万葉集』にもあるんだよとか、『なじょしっぺ』というのは『竹取物語』にも出てくるよと教えるわけです。『あけず』って『古事記』にもあるんだよって。そうするとおじいさん、おばあさんが古典のことばをしゃべってるってことでびっくりして、おじいさん、おばあさんを尊敬しだしたという、そういう子どももいるのです。

そういうふうにすることによって、子どもは方言の中に古語が残っているということを知っただけでも驚きで、家に帰って、おじいさん、おばあさんにそれを報告する。おじいさん、おばあさんに対する認識が変わる。それでおじいさん、おばあさんがとてもうれしくて、こんなことは初めてだと喜ばれることもあるのです。家族も巻き込む、そういう学習はとてもいいと思います。

方言を調べよう

上真野小学校 5 年 名前 (高野 夏希)

共通語	方言	使い方
牛	ペーゴ	ペーゴの子、生まつちや (牛の子どもが、生まれた)
かわい	めんむい	あそこのばちめんむいな
気味が悪い	きみわりい	このきみわりい
どうしよう	なじょし、パは	すい道でなはいは、なじょし、パは
おでこ	なづぎ	なづぎがなはい
つら	しが	あら屋根にしがは、た
兄	あんにま	あんにまが来たはあ
姉	あんな	あんなが来たはあ
赤ちゃん	あともこ	あともこが来たはあ
子守り	おとのもり	きょうはおとのもりだ、たはあ
うるさい	せつな	このかうしせつな、こと
おどろく	たまげ	あーたまげたな
はずかしい	しょうしい	あー、しょうしいこと
こじき	ほえど	ほえど来た
かげ口 (悪口)	ざんぞ	ざんぞでかた、てる
いやだ	やんだことお	あー、やんだことお
とんぼ	とんぼ	とんぼが、いと
行こう	いぐべ	ほら、いぐべ
だいじようぶ	だいじようぶだべ	こんなの、だいじようぶだべ
くものす	くものす	くものすだ、かちま、た
ちようちよ	ちようま	ちようま飛んでる
かまきり	かまきり	かまきりい、と
かまきりの卵	かまきりの卵	かまきりの卵、たとお
こわす	ぼいこす	ちやんぼらこした
どうもろこし	とうみぎ	とうみぎが、たはあ
おふろ	じやほ	いやほさ入、ハハあ
かみなり	らいさま	らいさまおで、から、はやくけハハあ
いなずま	ヒョカヒカ	あらヒョカヒカ、たとお
おてだま	いしなぐ	いしなぐし、ハ
かたぐるま	かたぐるま	かたぐるまして、もらて、いいな
トイレ	せ、ちん	せ、ちんさ入、てくるから

「方言を調べよう」ワークシート

方言を調べよう

上真野小学校 5 年 名前 (高藤 彩華)

共通語	方言	使い方
牛	ペーゴ	ペーゴの子、生まつちや (牛の子どもが、生まれた)
かわい	めんむい	あそこのばちめんむいな
気味が悪い	うだぞ	イグアア見て、うだぞ、アアアア
どうしよう	どうしつぽ	今日のスイミングに行くか、休むか、どつぽ
おでこ	でぶとこ	赤ちゃんおでこなんに、広くて可愛
つら	しが	さむさがさびいて、しがが下つた
兄	あんにま	あんにまが来た、いしに、おでこ
姉	あんな	あんなが来た、いしに、おでこ
赤ちゃん	あんな	あんなが来た、いしに、おでこ
子守り	おとのもり	おとのあとのもり、ほたい、たはあ
うるさい	せつな	おては、おでこで、せつな、たはあ
おどろく	おどろく	おどろく、たはあ
はずかしい	しょうしい	しょうしい、たはあ
こじき	おのもり	おのもり、たはあ
かげ口 (悪口)	ざんぞ	ざんぞ、たはあ
いやだ	やんだ	やんだ、たはあ
とんぼ	とんぼ	とんぼ、たはあ
行こう	やべ、んべ	やべ、んべ、たはあ
だいじようぶ	いべ	いべ、たはあ
くものす	くものす	くものす、たはあ
ちようちよ	ちようま	ちようま、たはあ
かまきり	かまきり	かまきり、たはあ
かまきりの卵	かまきり	かまきり、たはあ
こわす	ぼいこす	ぼいこす、たはあ
どうもろこし	とうみぎ	とうみぎ、たはあ
おふろ	すいふ	すいふ、たはあ
かみなり	らいさま	らいさま、たはあ
いなずま	いなずま	いなずま、たはあ
おてだま	おてだま	おてだま、たはあ
かたぐるま	かたぐるま	かたぐるま、たはあ
トイレ	トイレ	トイレ、たはあ

の木桶が落ちる、でんぐだ、つま、いいて、でんぐだ、たはあ、
ニれで、エンジ、ニれで、エンジ、たはあ

5. これからの国語教育

5. 1 子どもたちの将来のことばを形作る教育

ことばというのはこれからどうなっていくのか。将来どういうふうにならっていくのかというのは、私も非常に興味があるんですけども、ことばがどうなっていくのかというのは、子どもたちが今、どんなことばでしゃべっているか、どんな意識でしゃべっているか、現在の子どもたちを取り巻くことばの状態と、子どもの価値観というか、意識によって取捨選択されて、ことばを学習していく。小中学生は、いま学習途上で不安定な時期だと思うんです。

それが将来どんなことばになって完成するのか、どんな形にならっていくかということを考えたときに、その子どもたちが学習途上である小中学生のときに、どういう国語教育を受けたかというのがとても重要だと思うんです。ことばを見る目とか、聞く耳を敏感にするために、国語教育が果たす役割は非常に大きいと思うんです。教師のことば観とか、指導観とか、教材観とか、あるいは教師がもっている方言コンプレックスとか、そういうものが子どもたちに影響してくると思うんです。都会の教師と地方の教師の意識とか、そういうものが都会の子どもと地方の子どものことばにも影響しているんじゃないかと思います。『学習指導要領』がありますけれども、授業の中ではかなり教師の裁量に任されている部分が多いので、教師がどういうふう教材を扱うか、どういうふう授業をするかというのは、教師の自由裁量が大きいので、教師の興味、関心に左右される部分が多いと思います。

5. 2 地域素材を見つける ―学校用語の地域差

地域差があるものは面白いので、どんどん扱っていいと思うんです。「秘密のケンミンSHOW」という番組は非常に人気がありますね。学校用語でも地域差があります。

5. 2. 1 印刷用紙

私が福島で教師をやっていて感じたのは、印刷用の紙が印刷室に置いてあって、学校はたくさんプリントを印刷するんですけども、3種類の紙が置いてあります。一番悪い紙はザラ半紙、次が中質紙、上質紙と3つあって、ザラ半紙には、学校によって、いろんな言い方があったんです。ある学校に行くと「タイヨウ紙」と書いてあり、別な学校に行くと「タイオウ紙」と書いてある。何だろうと思ったら、何にでも使えるので「対応紙」なのだそうです。なるほど、これは面白いなと。教師が転勤して移動する、その移動によって、そういうことばもあちこちに移動しているんですね。移動してそのまま根づく場合もあれば、枯れちゃう場合もあるんですけども、印刷用紙の呼び方というのが非常に面白いし、各学校の印刷室に貼ってあるわけです。ただ、ちょっと残念なのは、最近、ザラ半紙や中質紙よりも、こういうコピー用紙が安くなりましたので、上質紙が多くなったんです。そうすると、印刷室に貼ってあったラベルも、最近、なくなった学校が多くて、もうちょっと早く調べておけばよかったなと残念に思っています。どこの学校も3種類の紙を使っていたので、3つの名称が必ずあったんです。

5. 2. 2 修正液

それから修正液もけっこう使います。事務をとっているときに。ボールペンとか万年筆で書いていますから。その修正液がありますけれども、それを「白チン」と呼んだりするんです。初めて、「白チン貸して」と言われたときに、なんのことかわかりませんでした。じつはけがをしたときにつける「赤チン」ってありますね。あの赤チンから白チンということばができたようです。

5. 2. 3 縄跳びの縄

それから冬場の体育の授業は縄跳びです。とくに南相馬市は原発事故の影響で、あまり外に出られませんから、体育館の運動が多いんですが、縄跳びをするときの縄で、短い縄と長い縄があります。その短い縄のことを、「たんなわ（短縄）」と呼んでいるのですが、長い縄のことは、「ながなわ（長縄）」と呼んでいるところと、「おおなわ（大縄）」と呼んでいるところがあるんです。まだ分布は調べていませんが。

5. 2. 4 徒競走

それから「かけっこ」です。走ることを「はねる」と言うので、かけっこは「はねっくら」ですが、会津地方では、走ることを「とぶ」と言うので、かけっこは「とびっくら」と言います。ですから、「さあとぶぞ、よーいドン」と言ったときに、子どもたちは走り出すのですが、他の地区から転勤してきたばかりの教師はピョンと跳んだそうです。

5. 2. 5 職務専念義務免除

休みをとるときに、年次休暇の他に年次休暇にならない休みがあって、職務に専念する義務を免除するというものが、地方公務員にはあります。それを「職専免」と一般に言うんですが、「義務免」という言い方をするところもあります。これも地域によって若干違っているということに、最近気がつきました。

5. 2. 6 自主学习／自主勉強

子どもたちがやってくる自主学习のことを「自学」と言います。これはいつから出てきたのか、昔はなかったと思うんですが。宿題のプリントのほかに、自主的に勉強してきたノートを出してもよいことになった。国語、算数、理科、社会なんでもいいから1ページ、勉強してきたものを教師に見せるというもので任意のものだった。それがいつの間にか、教師や学習係の児童が点検するようになり、「はい、〇〇くん、持ってきたかな、早く出しなさい」と、なった。自主学习の「自学」は必ず出さなくてはいけない宿題になったんです。すると今度は、自学とは別に、任意で自主的な勉強をやってきてノートを出す児童が出てきた。これが「自主勉」です。自主学习も自主勉強も、同じことだと思うんですが、必ずやっていく義務的なノートは「自学」で、それとは別に任意でやっていくのは「自主勉」と命名されたのです。よそでもおそらく生まれている可能性はあるのではないかという感じがします。

5. 3 方言調べは自分の耳で聞いて

子どもたちに方言調べの宿題を出すときには、家族に聞いたり、近所で聞いたりして、必ず自分の耳で聞いて、自分で書くようにと指示しています。というのは、本を書き写したり、親に書いてもらったりすると、正確でない場合があるんです。「あれ、これは変だな」と思ったら、やっぱり変だった。おかしいなと思ったら子どもが書いたものではなかったという、そういうことが今まで何回かありました。一番忘れられないものを紹介します。

質問文は、「枝豆をすりつぶして、そこに砂糖を入れて、餅に絡めたやつをなんといいますか」と聞くものです。これは仙台で有名になった「ずんだ餅」というものです。仙台では「ずんだ餅」ですが、福島県の「じんだ餅」と言っていたはずの地域で、「ずんだ餅」と書いてきた子どもがいたので、変だなと思って聞いたんです。そしたら、その家では「じんだ餅」と言っているけれども、おじいさんは「ずんだ餅」と書いた。なぜか。仙台で有名だから「ずんだ」が正しくて、「じんだ」はまちがっているんじゃないか。だから孫に教えるときには、正しい方言を教えなくてはいけないと思って、「じんだ」を「ずんだ」にしてしまったというのです。

「ずんだ」はもともと「じんだ」で、「じ」が「ず」に変わったのです。しかし、仙台でお菓子として有名になったものですから、福島で「じんだ」と言っていた人が、仙台で有名になった「ずんだ」に言い換えている。そんな人が少しずつ現れて、だんだん宮城のほうから「ずんだ餅」が、南のほうに来て、「ずんだ餅」の逆流現象が起きているような感じがして、面白いと思ったんです。

5. 4 方言を扱った授業の実際

方言の授業が紹介されたテレビの番組がありますので、最後にその中の一部分を皆さんにご覧いただきたいと思います。子どもたちが調べてきた方言を、方言辞典で確かめるという授業をやりました。方言辞典は三省堂の『都道府県別全国方言辞典』（佐藤亮一編，2009）を使いました。ちょっとご覧ください。（VTR 視聴）

時間がなくなってきた、途中、早口になってしまいました。あちこちバラバラにお話をしたので、まとまりがなかったんですけれども、ちょうど時間にもなりましたので、お話はここまでにしたいと思います。どうもご清聴ありがとうございました。（拍手）